

【教員寄稿】

あらためて痛感した、実際に足を運ぶことの大切さ
—はじめての地、久しぶりの地、あこがれの地を歩いてみて—

矢澤 達宏

想像とかけはなれた光景をまのあたりにした驚き、30年前からのあまりの変貌ぶりに対する衝撃、そして、かつてあとわずかのところで手の届かなかった場所にようやくたどり着いたときの万感。いつもならレポートの添削や期末試験の作問・採点などに忙殺される7月、去年は四谷を遠く離れアフリカの地でさまざまな感情や感慨にひたる日々を送った。たとえ本格的な調査でなくとも、現地にくることで発見する、わかる、感じるものがたくさんある。ありきたりだが、ひと月あまりの滞在でもっとも痛感したことだった。

自分が研究対象とするアフリカとブラジルのうち、後者では1年間留学していたこともあっていくつかの拠点を築くことができ、それらを足がかりに定期的な現地調査を比較的スムーズにおこなってこれた。だが、アフリカではそうはいかなかった。もっとも注目してきたポルトガル語圏の諸国にかぎっていえば、モザンビークこそ30年前にはじめて訪れて以来、都合4度の訪問機会をもったが、カボベルデとギニア・ビサウは8年前、サントメ・プリンシペは一昨年がそれぞれ唯一、アンゴラにいたっては昨年がはじめての訪問であった。しかも一か月を超える滞在は一度もない。むろん、実際に訪れる以前にも、さまざまな文献、情報、そして映像も含めた資料等を通じてこれらの国々について調べ、研究を進めてはきた。自分が専門とする政治・歴史の領域では、それで成り立つ研究も少なくない。ただ、いざ現地に赴き、この目でみた社会は、それまで抱いていたイメージとはかなり異なる面もあったのは事実である。従来、研究において提示してきたこと、授業で語ってきたことを誤りとしてしまうほどではなかったとしても。

サバティカル・イヤー（研究休暇）となった2024年度、わたしはアンゴラとモザンビークを訪問することにした。両国への入国には最近までビザが必要だった。とくにアンゴラはその取得手続きが面倒で、そのことがずっと同国訪問のハードルとなってきた。それが一昨年からは、どちらの国も短期滞在であれば不要となり、これが大きな後押しとなった。

まずは香港、南アフリカを経由して、ほぼ一日半かけてアンゴラに入った。一週間は首都ルアンダでおもに公文書館や図書館で研究のための史料を探したり、現地の研究者と会って話を聞いたりした。残りの一週間はいくつかの地方都市を訪ねてまわった。首都はある意味、以前からドキュメンタリーやインターネット経由のさまざまな情報から思い描いた想像の範囲内だったが、地方は違った。地方に関してもある程度の知識はあったが、思いがけない光景にあっけにとられることも多かった。

とりわけウアンボ（Huambo）は印象的だった。アンゴラ中央高原に位置する内陸部の中心都市のひとつで、植民地時代にはニューリスボン（Nova Lisboa）と呼ばれていた。しかし、独立とともに始まったアンゴラ紛争ではたびたび激しい戦闘の舞台となり、住民は蹂躪され、街は破壊され尽くしたという。そうした経緯を知るだけに、どうしても暗いイメージが先に立ってしまう。だが、ウアンボの中心部でわたしの目にとびこんできたのは予想外の情景だった。芝生に縁取られた広大な円形広場、それを囲む環状交差点、そこから規則正しく放射状にのびる街路、木々の緑と噴水の輝きが目にまぶしい庭園。

空気も高原らしい爽やかさで、この街が背負う負の一面を想起するのは難しい。きれいな街並みは、もちろんかつてポルトガル人が建設したものであり、その裏には地元アフリカ人たちの多大な犠牲があったことをけっして忘れてはならない。だが、植民者たちが自分たちの「新しい都」の夢を託した土地が元来持つ自然の恵みまで否定するいわれはあるまい。

モザンビークでもやはり、首都より地方の方が印象に残った。かつて選挙監視の仕事で滞在した北部の中心都市ナンプラ (Nampula) は、当時、終わったばかりの紛争がまだ暗い影を落としていて、モノは不足し、街ゆく人びとも少なめだった。今回はじめて再訪するにあたり、30年も経てば様子も相当変わっているだろうと予想してはいたが、その度合いは想像をはるかにこえていた。街路という街路はショッピングセンターから露店まで大小さまざまなビジネスで埋め尽くされ、人とモノがあふれ活気に満ちあふれている。

つづいて、長年の夢であったモザンビーク島へ。ナンプラからクルマで2~3時間のこの地は、モザンビークの国名の由来ともなった植民地時代の古都であり、またアフリカ大陸インド洋沿岸のイスラームの影響を受けたスワヒリ文化圏の最南端とされる。往時をしのばせるモスクや古い街並みが残り、UNESCOの世界遺産にも登録されている。選挙監視のときにはその数十km手前まで行きながら訪れることができず涙をのんでいた。今回ついに訪問が実現し、かねて書籍で学び、映像資料でみていた島の史跡の数々を実際に目にして感慨もひとしおだったが、それ以上に印象的だったのが島の人びとの生き生きとした日常だ。夕暮れどき、制服を着た少年少女たちが連れ立って楽しそうにじゃれあいながら学校に向かう、なにげない光景がなぜだか目に焼きついている。

「海外のことを学ぶなら、実際に現地に行かなきゃダメだ」。わたしは学生たちに対し、そのような考えを否定してきた。留学したくても、さまざまな事情で断念せざるをえなかった学生たちをこれまでみてきた。短期旅行ですら、昨今の円安・物価高のご時世では容易でない。なにより、もし現地に行くことが不可欠なのだとしたら、日本での学びで完結するカリキュラムの外国研究の学部で教鞭をとる自分自身の否定につながる。いまは書籍等のほか、インターネットを通じ、海外の人びともコミュニケーションがとれるし、Google Earthで街の様子をかいまみることだってできる。利用できる資源を活用すれば、日本にいながらにして海外について研究することは十分可能だ。現地に一度も行くことなく、すぐれた卒論を書いた学生は何人もいた。ただ、研究はできるが、現地に行ってみないとわからないこと、気づけないこともやはりある。あらためてそう感じたアフリカ滞在だった。